

「迷走フェミニズム」

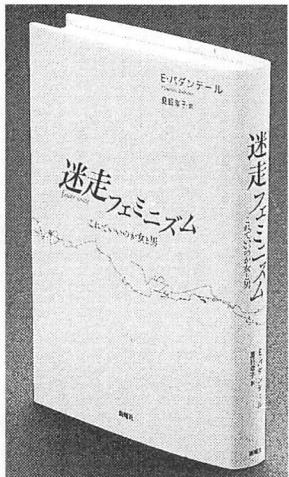
E・バダンテール著
夏目幸子訳

フランスのフェミニズムの第一人者であるバダンテールの新著だ。この本で著者は、アメリカのラディカルフェミニズムを痛烈に批判している。そして、彼女たちのことを、男女の機微を知らない無粹な輩としておろしている。

著者は言う。「男性に外の生活では対等の『パートナー』であつてほしいが、ベッドでは力強く支配してほしいと要求する」となどは、ラディカルフェミニズムによつては論外のこととされるが、それでは女性の気持ちをすくい取れないのではないか。あるいは、「望んでいない性的誘い」は糾弾すべきとラディカルフェミニズムは言つが、それは「男女関係においては自然な現象で、かつ文化の一部」なのである、と。望んでいた性的誘いを探し当てるのが、女性が築き上げた文化なのだというわけである。

もちろん著者はフェミニストであるから、現状の男女のあり方を肯定しているわけではない。経済面の不平等、女性の社会進出、家庭での暴力など、女性にとって不利な状況はまったく改善されていない。それらは、両性の平等という観點から、是正されなくてはならない。これが著者の基本的な考え方である。そのうえで著者は、アメリカの影響を受けた現在のフェミニズムが、迷走を始めているのではないかと訴えるのである。

まず、フェミニズムは女性を「犠牲者」として捉えようとする。それは極端なまでに進行し、いまや女性は実際に犠牲者であるか、さもなく



また、男性はつねに女性を支配してきたし、女性を抑圧する社会体制に加担してきたとする説は、今まで多くの男性たちに被害感を生み出す元凶となっている。「一方に無力で抑圧された女があり、他方に乱暴で支配と搾取を行う男がある」という構図からは、何ものも生まれない。

男性性を敵視する「の思想は、女性とともに母性を賞賛する母性主義」だけではフェミニズムに未来は訪れないと考えている。そしてフランスでは、もっと別の方法が必要ではないかと訴える。男性と女性を敵対させることではなく、現存する不平等を両性が協力して解決していくような運動こそが必要なのだといつのである。

フランスのフェミニズムの現状を垣間見ることのできる好著であるが、これが日本でどのように読まれるのか大いに気になる。フェミニズムバッシングが吹き荒れる女性政策の世界や教育界で、都合のいいところだけがつまみ食いされるのではないか? 「ほら見る、フランスではフェミニストがジェンダーフリーを批判しているじゃないか」などの曲解が横行する危険性はないのだろうか。学界からは、著者が目の敵にしているフェミニズムは「一時代前のものである」という批判がなざされるであろう。誤解や黙殺にさらされるのは間違いないと思われるが、それでもなお同時代のフェミニストからの真摯な声として一読に値すると私は思うのである。

◇ Elisabeth Badinter 1944年生まれ。フランスのジェンダースタディーズの最高権威。2005年まで理工科学校で哲学を教え、哲学者・歴史家としての著作で知られる。著書に「母性」という神話など。

◇ なつめ・さちこ 1969年和歌山県生まれ。大阪外国语大学教授。最新エッセーに「日仏カップル事情—日本女性はなぜモテる?」。

1944年生まれ。フランスのジェンダースタディーズの最高権威。2005年まで理工科学校で哲学を教え、哲学者・歴史家としての著作で知られる。著書に「母性」という神話など。

◇ もりおか・まさひろ 大阪府立大教授。専門は現代思想。1995年高知県生まれ。

森岡 正博 が読む

